

# 天正少年遣欧使節の光と影—キリシタン版と製作に関わった日本人

岡 美穂子

## はじめに

16～17世紀の日本におけるキリスト教布教といえば、ザビエルやヴァリニャーノ、フロイスなどの、ヨーロッパ人宣教師が想起され、「西洋の」宗教が日本で受容されたエキゾチックなイメージが先行する。実際には、イエズス会（とくにイタリア人の東インド巡察師ヴァリニャーノ）は、日本人に「日本の在来宗教」との違和感を感じさせぬよう、随所に細やかな工夫を施した布教方針を定めた。これを先行研究では「適応主義」と呼ぶ。中でも重要だったのが、日本

人宣教師の活用である。より率直に言えば、「キリシタン」の伝道や指導の大半は、日本人宣教師（伊留満、同宿、看坊等）によっておこなわれた、と言っても過言ではない。とりわけ重用されたのが、元は仏教僧侶の宣教師であったことが近年の筆者の研究で分かってきた。これらの日本人宣教師たちは、日本では画期的であった活版印刷事業、いわゆる「キリシタン版」製作でも重要な役割を果たしていた事実をここでは紹介したい。

## 天正少年遣欧使節と活版印刷

「キリシタン版」は大きく4つの種類に分けることができる。1) 日本人にキリシタンを弘めるにあたり、日本人宣教師が学ぶべき教理等を印刷 2) ヨーロッパ人宣教師が日本語を学ぶためのテキストを印刷 3) 辞書類 4) 信徒が唱えるオラシヨ（祈祷）や簡易教理書の印刷物、である。

日本に最初の活版印刷機がもたらされたのは、天正少年遣欧使節の帰国の際であった。よく知られている4人の少年（伊東マンシヨ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアン）以外

に、印刷技術を学ぶため、3人の少年がヨーロッパへ派遣されたことはほとんど知られていない。この少年達の名はジョルジ・デ・ロヨラ（1562?-1589）、コンスタンティーノ・ドウラード（1566?—1620）、アゴスティーノ・ドウラード（コンスタンティーノの兄弟か?）である。中でもコンスタンティーノ・ドウラードは、ラテン語とポルトガル語に秀でており、父親がポルトガル人商人であったという説もある。コンスタンティーノは長崎の諫早出身で、1570年代にはイエズス会の教育施設にいた。そこで同

宿として勉学に励み、少年使節と共に渡欧、帰国後しばらく経った1595年、イエズス会にイルマンとして正式に登録された。すなわち、イエズス会施設で働くようになってから20年近くの間、正式なイエズス会士ではなく、宣教師

たちを補助する同宿の立場に留めおかれた。江戸幕府が禁教令を發布した(1614)後にマカオへ渡り、1616年にマラッカで司祭に叙階された。マカオに戻った後、イエズス会のセミナリオの院長を務めたが、1620年に死去している。

## 日本イエズス会の組織構造

日本のイエズス会は正式会員であるパードレ(司祭)、イルマン(修道士)の他に、同宿、看坊、小者などと呼ばれる日本人が属する大規模組織であった。実際にはヨーロッパ人宣教師の数は限定的で、宣教師の圧倒的多数を占めたのは、同宿、看坊、小者に分類される日本人で、名前すら分からない者も多い。看坊は領主による集団改宗でキリシタンに転じた仏教寺院の僧侶で、教会に転用された旧来の寺院に住み、キリシタン(旧檀家)の面倒を見る役割を担った。ゆえに葬儀、日常的な宗教指導などは、同宿、看坊が中心に行っていた。布教活動の中で印刷業務の大半を担ったのは、このような日本人であった。1570年代から1590年代にかけて、東インド巡察師としてインドから日本までの布教区を統括したアレッシャンドロ・ヴァリ

ニャーノは、日本での宣教に現地人が不可欠である理由を次のように述べている。

「当初から今日に至るまで、日本人修道士の数は不足しており、言語や風習は我等にとって、はなはだ困難、かつ新奇であるから、これらの同宿がいなければ、我等は日本で何事もなし得なかったであろう。今まで説教を行い、教理を説き、実行された司牧の大部分は、彼等の手になるものであり、教会の世話をし、司祭たちのための交渉の文書を取り扱い、先に述べた茶の湯の世話をするのも彼等である。…彼等はまた、埋葬やミサ聖祭、聖体行列、および盃や肴をもって客を接待するのを手伝う。」(アレッシャンドロ・ヴァリニャーノ著『日本諸事要録』1582年より)

## 琵琶法師とキリシタン布教の密接な関係

天草版と呼ばれる初期のキリシタン版に、ローマ字の日本語で書かれた『平家物語』(1592)がある。『平家物語』そのものは、室町時代初期から盲目の琵琶法師たちが語り継いできた物語で、日本人の死生観に極めて大きな影響を与えている。イエズス会の日本布教では、上で述

べたような仏僧の他に、これらの琵琶法師たちも活用されていた。よく知られているのは、平戸出身のロウレンソ了齋(1526～1592)、山口出身のトビアス等である。ロウレンソは宣教師が織田信長や豊臣秀吉などの為政者や武将等と面会する際には、必ず付き添い、仏教諸宗派と

の宗論もロウレンソが主体となって行われた。もともと琵琶法師という職業特性上、語りを得意とし、大名や武将との交流に必要な礼儀・所作を体得していたと思われる、戦国時代のキリシタン武将として有名な高山友照、右近父子の入信はロウレンソの功績によることが知られる。16世紀後半、「<sup>けんぎょう</sup>検校」と呼ばれる朝廷から特殊な許可を得た京都の盲人50人のうち、5人が

## 不干斎ファビアン

不干斎ファビアンは、天草版『平家物語』『伊曾保物語』の編者、『妙貞問答』の著者として知られる。キリシタン入信以前は臨濟宗の本山（大徳寺もしくは南禅寺）の仏僧であった。頭脳明晰で、受洗後かなり短い期間でイエズス会の正式な修道士であるイルマンに採用され、日本人の若者が神学その他を学ぶコレジオで教鞭を執った。ファビアンが教える天草のコレジオでは、帰国後の天正少年遣欧使節のうち、伊東マンショ、中浦ジュリアン、千々石ミゲルの三人が勉学に励み、有能な原マルチノだけが別格扱いで、ヨーロッパ人の布教長の秘書を務めた。1603年以降は、京都の下京教会にあって、主に徳川家康や諸大名との交渉で中心的な役割を果たした。

1607年頃、京都の下京教会には、ファビアンの他に、イルマンとして中浦ジュリアン、原マルチノらが所属していたが、秀吉の時代から政権と深い繋がりを持ち、学識の深いファビアンこそが京都のキリシタン界の中心人物であった。しかしながら翌年、突如ファビアンはキリシタン界を棄て、女性信者と駆け落ちする（イ

キリシタンの宣教者となった。仏教の知識が豊富な寺院勤めの元仏僧のほか、「語り」を得意とする琵琶法師も大いに活用されたことを考えれば、外国人宣教師の日本語学習のために作られたとされる天草版『平家物語』は、語学のみならず、この物語に込められた日本的な「哲学」を、学習者が体得するのにも有益であったろう。

エズス会史料に拠ればであるが)

先行研究では、この唐突なファビアンの棄教



図 大英図書館所蔵 天草版平家物語 パブリックドメイン

の陰に、同じ教会にイルマンとして所属していた原マルチノと中浦ジュリアンの司祭叙階が決定した事実があったことが言及されたことはない。しかしながら、筆者はこれこそが、ファビアンの突然の棄教の理由であったと考えている。

当時、日本人が司祭に叙階される例は僅少であったが、留学エリートで、イエズス会の日本布教のシンボルとも言える存在であった天正使節の彼等は、語学に秀で、ヨーロッパ人宣教師

との繋がりも深かった。ほぼ同年齢で自分の後進であったマルチノやジュリアンが司祭に叙階されるという事実が、どれほどファビアンを傷つけたかは想像に難くない。ファビアンは脱会にあたり、上長のペドロ・モレホン（スペイン人）に対して、イエズス会内部の様々な問題点を論じた書状を送ったと言われる。それ以後ファビアンは「背教者」として、それ以前の功績も抹消され、日本語で書かれた彼の著作のみが残った。

## おわりに

キリシタン版の制作には、1) 日本語が堪能なヨーロッパ人、2) ヨーロッパ言語（ポルトガル語・ラテン語）が堪能な日本人、3) 日本文化の教養レベルが高い日本人、4) 印刷業に専従する同宿たちの4つの立場の人々が主に関わっていたと考えられる。代表者として名前が残りやすいのは第3の「教養レベルが高い日本

人」で、彼等は、日本人が元来有する宗教的フレームワークに、キリスト教を融合させる役割を果たした。その結果、生まれたのが「キリシタン」というシンクレティズムの宗教であり、日本人の宣教師の存在なくしては、日本にはキリスト教は如何なる形でも根付かなかったと考えている。

## 参考文献

- アレッシャンドロ・ヴァリニャーノ著（松田毅一監訳）『日本巡察記』平凡社東洋文庫、1973年（『日本諸事要録』『補遺』を所収）。  
岡美穂子「僧形の宣教師」齋藤晃編『宣教と適応 グローバル・ミッションの近世』名古屋大学出版会、2020年。  
岡美穂子「キリシタンと統一政権」藤井譲治編『岩波講座日本歴史 近世1』第10巻、2014年。  
Oka, Mihoko, "The Christianity as a sect of new Buddhism -focusing its appearance and adaptation policy- (tentative)", *Cambridge History of Japan*, vol.1, Cambridge University Press (forthcoming) .



岡 美穂子（おか・みほこ）

【専攻領域】 海域アジア史／宗教史／日本における外国文化  
【最近の編著書】

Haneda Masashi, Oka Mihoko (eds.), *A Maritime History of East Asia*, Kyoto University Press, 2019.

ルシオ・デ・ソウザ・岡美穂子『大航海時代の日本人奴隷』中央公論新社、2017年

【所属・職名】 東京大学大学院情報学環 准教授 史料編集所（兼）

【所属学会】 日本宗教文化史学会